

Leader

名古屋学院大学・学長

木船久雄

Interviewer

進研アドBetween編集長

長田雅子

自らアクションを起こし 未来を切り拓いていく 人材を育てたい

未曾有の大震災が起こり、政治や経済が混乱する今、大学はその役割を問われている。4月に名古屋学院大学の新学長に就任した木船久雄氏に、大学としてどのような人材を育てたいと考えているのか、抱負を聞いた。

知の拠点として 社会に貢献する大学へ

長田 新学長就任おめでとうございます。まずは学長としての抱負をお聞かせください。

木船学長(以下木船) 今は大役に身が引き締まる思いです。学生たちはここで4年間を過ごしますので、自分の成長を確信できる大学にしていきたいと考えています。そのためには、授業やゼミはもちろん、留学など異文化に触れる機会、地域貢献プロジェクトへの参加の機会など、さまざまなチャンスを用意しています。それらを体験することによって、自ら考え行動する人に育ってほしいと思います。

大学は知の拠点であり、そのミッションは「教育」「研究」「社会貢献」です。教育については、個々の学生に丁寧な指導をしていきたい。本学はキリスト教主義の大学で「敬神愛人」という建学の精神を掲げています。これは「神を敬い、人を愛する」という意味ですが、広く解釈すれば、「学ぶ者も教える者も謙虚であれ、他者に優しくあれ」ということ。そうすれば自らも世の中も、より良くなっていくでしょう。この「敬神愛人」をベースに、一人ひとりを大切にする教育を行いたいと考えています。

教員の皆さんには大いに研究活動を進めていただきたいと考えています。ただし学生と向き合う時間はしっかり教育をし、それ以外の時間を使って研究を深めてほしいと思います。

最後の社会貢献は、私が強く意識している分野です。教育と研究の成果を社会にもっと還元していきたいのです。積極的に社会貢献の情報を発信してい

きます。

長田 さまざまな社会貢献のプログラムが進んでいますが、どういうお考えからですか。

木船 例えば、養蜂を通して生物多様性を考える「ミツバチプロジェクト」では、学生が主体となって地域の中で蜂の生態を調査したり、蜂蜜入りのパンを販売したりしてきました。このように大学が持つ教育と研究のコンテンツを、社会のために生かす方法を考えなければなりません。本学には専任の教員が150人近くいます。おのおのの研究を一般の人にもわかりやすく発表できる、シンポジウムや公開討論会の場をつくりたいと考えています。

大学が知の拠点として社会および地域に貢献することは、地元の住民、学生、大学など、すべてのステークホルダーをwin-winの関係にします。誰にとってもメリットがあるハッピーな関係づくりを、大いにやっていこうと思います。

地域とかがわれば 学生は確実に成長する

長田 2007年に開設された白鳥学舎は、周囲と一体化してとても開放的に見えます。設計上の工夫をされたのですか。

木船 はい。校舎を地域に開放しています。名古屋市からも「柵を作らず公園のように開放したキャンパスをつくってほしい」という要請がありました。図書館は、近隣の高校生が試験前に勉強したり、一般の人たちが土曜日に利用したりしています。

校舎の隣には名古屋国際会議場があるのですが、2010年にここで

COP10(生物多様性条約第10回締約国会議)が開かれました。大学の建物も会場の一つになり、学生は海外の人々を案内するボランティアとして活躍しました。この会議場をはじめ、大学近隣でさまざまな会議が開かれると、地域ぐるみで教育活動を行えます。

学生がかかわる社会貢献で大事なものは、それが「教育になっているか」ということです。大学にとって、地域社会は生きた教材です。学生は大人と付き合うので、スーツを着てしっかり話をしなければなりませんし、ダメなところは指摘されます。地域にとっては、学生が動くことによって街が活性化するというメリットがあります。地域とうまくかかわることができた学生は、確実に成長していきます。中にはうまくかかわれない学生もいて、教育としての難しさを感じますね。

長田 学生支援の取り組みについて教えてください。

木船 2010年5月に「S-プラッツ」という名の学生支援総合窓口を開きました。Sはスチューデント・スタッフ・サポートで、プラッツ(Platz)は人々が集う場という意味のドイツ語。さまざまな学生のムーブメントを支援したり、悩み相談を受け付けたりする場所になっています。先に述べたような、地域とうまくかかわれない学生は、ここですくい上げたいですね。

S-プラッツは現在、東日本大震災復興支援のボランティア窓口にもなっています。すでに自分たちで行動している学生もいるのですが、大学としては窓口で登録してもらったうえで、組織化して後押ししたいと考えています。

そのほか、学習面で苦勞している学生のために教育学習支援センターを



きぶね・ひさお 1955年静岡県生まれ。早稲田大学大学院商学研究科博士課程前期修了。(財)日本エネルギー経済研究所・第六研究室長を経て、1992年名古屋学院大学経済学部助教授、教授、情報教育センター長、経済学部長、大学院経済経営研究科長を歴任し、2011年学長就任。専門は資源経済学、エネルギー環境政策。

設け、高校の教員経験者や上級生が基礎から指導しています。

もう一つ、本学の大きな特徴は、CCS(キャンパス・コミュニケーション・システム)という独自の学内ポータルサイトがあることでしょう。教員はここに解答・解説が付いた自学自習の問題を載せており、大学全体でその数は2万題にもなります。学生は授業の前後に積極的に活用して学んでいるようです。わからないことがあれば、直接教員に質問を投げかけることも可能です。単位の実質化にも貢献するツールと言えるでしょう。

CCSは、学内の誰もが自由に見られるため、誰が何をどの程度まで教えているのかが共有され、教員同士の理解が深まるという利点もあります。今後は、スマートフォンや携帯ゲーム機などからも、いつでもどこでもアクセスできるように進化させていく予定です。

挨拶のパワーで 人を変えていきたい

長田 非常に混迷した時代を迎えています。大学としてはどのような人

材を育てたいとお考えですか。

木船 この震災を通して考えたのは、やはりキリスト教主義の大学として、他者に配慮できる思いやりのある学生を育てたいということでした。本学は最先端の研究者を養成する大学ではありません。95%の学生は企業に就職し、社会に出ていきます。そういう意味では、自分の可能性を信じてさまざまなチャレンジをし、社会の常識を逸脱せず、よき隣人になれる人材を育てたいと思っています。

「がんばろう日本」と言いながら、自粛ムードで閉塞感が蔓延していませんか。このような時は、自分で何かを見つけて力にしていかなくはなりません。待っているのではなく、行動をしてほしい。「求めよ、さらば与えられん」と聖書の言葉にもあるように、自らアクションを起こせばたくさんの人が手を差し伸べてくれるはずです。

私の持論は、「愛するは挨拶から始まる」ということ。大学の校門に立って、挨拶運動をしているんですよ。挨拶はコミュニケーションの第一歩。挨拶から始めて、仲間への愛を広げてほしいと願っています。